近代における別府鉄輪温泉の諸相

大　山　琢　央

第１章　はじめに

近代における交通機関の発達は人々に旅行機会を与え、大正から昭和初期にかけて「観光ブーム」が起こった。当時、国策として観光は重要視されており、観光客の需要喚起のために各温泉地も、鉄道省による『温泉案内』などのガイドブック刊行、1929 年（昭和４）の日本温泉協会設立など、観光資源として政府が率先して宣伝した。これにより温泉地では、投資家や観光ブレーンによる開発が進み、一躍湯治場的機能から行楽・慰安を目的とする観光地へと変容を遂げていった。

別府温泉郷の発達・変容も上記の流れの中に位置づけられる。別府は古くから著名な温泉地として広く認識されていたが、近代に入り、当時のガイドブックにも「九州一の温泉地」(1)と紹介されるほどの温泉観光地として急速に発展した。別府温泉郷（別府八湯）の一つ、鉄輪（かんなわ）温泉は古来より湯治・療養の温泉地として続いていたが、近代に入ると「地獄巡り」の開発・整備といった観光インパクトを鉄輪に与えており、同時代の地域の様相に本稿は着目する。

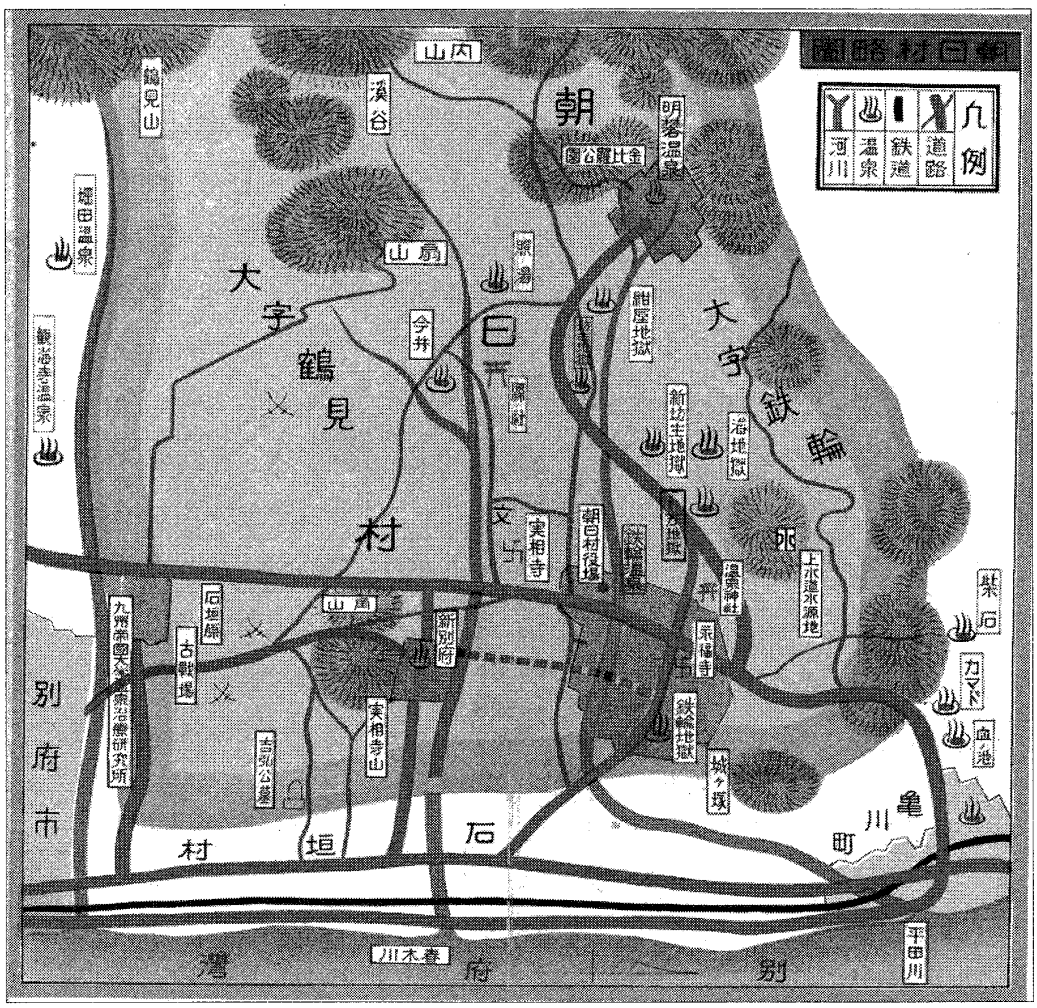
こうした近代における温泉地の変容などに関して、地理学による考察としては北関東を事例地として同温泉地の近代化への変容過程を交通機関と利用形態の変化から考察した関戸（2004）(2)、南紀白浜温泉の形成過程を、他所イメージとの関係性を中心に考察した神田（2001）(3)などの論考が挙げられる。とりわけ別府温泉に関する論考は、別荘地開発について論じた高砂（2000）(4)、中山（2003）(5)、泉源開発や旅館群の業態・立地傾向などの変遷を追った松田・大場(6)、浦(7)による研究が挙げられる。一方で、別府八湯個別の事例研究に関しては十分であるとは言い難い。鉄輪温泉における事例研究も同様であり、鉄輪の湯治場的機能の変遷を論じた小堀・山村（2004）(8)、地獄巡りの観光開発を所有権や開発形態の側面から考察した中山（2005）(9)、鉄輪温泉を多角的視点から観光地としてのポテンシャルを分析した浦（2000）(10)などの論考が、管見の限り確認されるに過ぎない。しかし、近年別府市が 2005 年度より国の「まちづくり交付金」を活用した鉄輪の都市再生整備計画を行うにあたり、地元からの依頼で別府大学文化財研究所が行った調査(11)や、これと並行して別府大学地理学研究室が行った調査(12)の成果が挙げられており、研究蓄積が徐々に出来つつあるが、近代・戦前の地域諸相に関しての分析考察は依然として研究余地があると考えられる。

よって本稿では別府市鉄輪温泉を事例地として、近代における同温泉地の諸相を、各種資料を用いて分析考察することを目的とする。以下、第２章では鉄輪温泉の概略を述べ、各年代の旅行案内書などの文献記述から語られている鉄輪温泉の様子をまとめる。第３章では文献記述の内容から項目ごとに詳細に検討・考察を行い、第４章をまとめとする。

第2章　鉄輪温泉の近代

1）鉄輪温泉地区の概略

鉄輪温泉は別府市街地の西北8㎞の所に位置している。古来より別府八湯の一つとして、開湯起源は鎌倉時代に一遍上人によるものとされている。「蒸し湯」と呼ばれる温泉の蒸気を利用した石風呂と共同浴場を中心に集落が展開しており、ひなびた湯治場として多くの人々が訪れていた。とりわけ、蒸し湯に関しては江戸時代のいくつかの記録[13]にも登場するほど世に知られた存在であった。近代に入り、鉄輪村を経て1889年（明治22）に朝日村村制施行に伴い、鉄輪集落はその一部に組み入れられた。朝日村の村域は別府八湯の内、鉄輪・明礬温泉を抱え、更にはいわゆる「地獄地帯」の大半を網羅しており、隣接する別府市と並ぶ温泉資源に突出した土地柄であった（第1図参照）。主な産業は農業に拠っており米・麦・青莚・柑橘類を産し、明礬地区では湯の花を製造していた[14]。昭和初期の全村世帯約560戸、人口は約3100人を数えていた[15]。朝日村は1935年（昭和10）に別府市・亀川町・石垣村と合併し、別府市の一部となり現在に至っている。



第1図：朝日村略図
（注）『鉄輪と明礬温泉』（1931）より抜粋

2）文献記述からみる近代の鉄輪温泉

鉄輪温泉が近代においてどのように喧伝されていたのか、当時のガイドブックなどの記述からみていきたい。第１表は時系列に沿って主な文献記述から関連する箇所を抜粋し、項目ごとにまとめたものである。

『日本鉱泉誌』は 1886 年（明治 19）に内務省衛生局によって出版されており、温泉を近代的視点でまとめた初の著作である。他には、『別府温泉誌』といったローカルな視点による地誌的な内容のものから、『温泉案内』『日本案内記』といった中央の視点で著されたものなどを資料として集めた。『温泉案内』『日本案内記』は鉄道省によって編纂されたものであり、冒頭で述べたように当時、ガイドブックの編纂や観光旅行は国家（国鉄）主導で行われていた。

次章では第１表の内容を元に、「旅館」や「街のようす」など各項目の検討を行っていく。

第１表：文献記述にみられる鉄輪温泉

年代	共同浴場（蒸し湯について）	共同浴場（その他の浴場）	旅館	街のようす（景観・土地柄）	交通	地獄・地獄めぐり
1886 年（明治 19）『日本鉱泉誌』	▼蒸気浴：（土地の人は「蒸湯」という。浴室の形状は六稜にして、周囲を石で畳み、上に木を架し、土を蔽う。中は 16 人が入れる。）	▼渋の湯：微黄色透明臭気なく、味酸鹹なり。反応は酸性にて…（後略） 渋の湯は源泉の傍に浴場あり、二槽を置く。 ▼熱の湯：無色やや半透明にて無臭無味なり。その反応は中性にて…（後略） ▼また海地獄温泉（渋の湯を距る数歩。この泉を引きて一瀑を為す）などあり。		▼この地はすこぶる温泉の気脈多く、路傍及び人家接近の所の道々、含硫蒸気を噴出す。土地の人は竈をこれに築き、或いは竹筧を架してこれを引き、以って薪炭の用に換ふ。	▼別府港を距る西北１里あまり、行路ややデコボコなれども、車馬を通すべし。	
1902 年（明治 35）『豊後鉄輪温泉誌』	▼蒸の湯：（前略）…浴場は一遍上人が開闢以来 200 有余年の間に湯屋の設けは無く、単に小屋掛けにて雨露を凌いでいたが、文治 6 年始めて貫屋を建て、爾後数度の改築をなし、明治 25 年に至り一大改良を加えて浴客の便を図った。その構造外部は不等辺 6 角形＿削石を以って之を覆い、内部は石畳にして中央に一大石柱を建て、柱の周囲に枕石 16 個を置き、以って 16 人を臥せしむべし。	▼新湯：本湯は泉源海地獄にして浴場は明治 28 年の新築なり。その構造最も壮大清潔にして普通湯の他、砂湯及び蒸湯の設けあり。そばに七つ瀧の温泉、数条の瀧となりて落下し、両泉共にすこぶる効験あり。 ▼渋の湯：本湯は別名「有命湯」と言い、その起因は蒸し湯と同じ。しかして浴場はしばしば改築せしも、その年月詳しからず…（後略）。 ▼熱の湯：本湯は 600 年前より湧出したるものにて、浴室の建築は天正 6 年にして、延享 2 年再築し、文久 3 年大改良を加え、明治 28 年更に現今の浴場を改築せり。	▼富士屋本家邸内温泉：本館は鉄輪唯一の大旅館にして…（中略）…家屋は三層楼にして邸内に特効の温泉 2 ヶ所及び蒸湯あり。…（中略）…当館は本編口絵の如く別荘あり。その別荘は近年の新築にて、其の構造すこぶる壮麗を極め…（略）。大分新聞紙上「本県避暑旅館投票」の際、当富士館は県下第一位を占めたり。…（中略）…当館の特色は宿費廉価に待遇丁重なるにありて、為に来客非常に多く…（後略）。	▼山紫水明の仙郷▼当地（鉄輪）は土地高燥気候温和にして夏期は清涼に、冬期は軽暖に加えて特効の温泉もあり、誠に避暑避寒共に好適の最良地なり	▼人力車・馬車は浜脇・別府・日出・立石・宇佐方面にがある。	▼タチウ地獄 ▼鬼地獄 ▼坊主地獄 ▼海地獄 ▼紺屋ノ地獄 ▼血ノ池地獄 ▼（地獄と称するが）何れも温泉湧出の湯地にして鉱泉常に沸騰して蒸発気あり。
1909 年（明治 42）『別府温泉誌』	▼蒸風呂：その構造は熱湯の蒸気を以って、身体を温める仕掛けなり。すなわち石室を熱線上に構え、その外部は不等辺 6 角形にして戸口を極めて小さく狭くし、室内に一大石柱を建設してその周囲に 16 個の枕石を設け、以って同時に 16 人の患者を臥さしむ。	▼渋の湯：その浴場は明治 8 年の築造に係り、石を以って外部を囲み、湯船を設けて温泉を湛えしめたれば、泉源混々として新陳代謝し、槽中すこぶる清潔なり。 ▼熱の湯：明治 28 年中、海地獄の温泉を引きて新たに開設したる泉場なり	▼客舎の数、10 余戸あり。富士屋を以って第一とす。なお萬屋・常盤屋などいずれも中等以上の客舎なり。	▼鉄輪は其の地山中に在りといえども、沿海の諸村落をさること甚だ遠からざるを以って、魚類等に不自由を感ずることなし。 ▼地勢山腹に位してすこぶる展望に富み、土質乾燥にして大気最も清鮮なり。 ▼山中に在りといえども、人家稠密にして…（後略）。 ▼いたる所、蒸気を噴出するを以って、毎戸の檐前（≒軒先）小穴を穿ち、その口頭に環藁をめぐらし、釜甑を掛けて飯を炊き、又蔬菜を煮るの用に供す。温泉は古来著名のものにして夙に世に知られたるところなり。	▼道路は見越町字里屋より里 5 合余に多少の凸凹あるは免れずといえども、人力車は容易に通ずるを得。	▼村隅に一巨池あり、広さ 3、4 反歩、その深さ計るべからず。湯色深緑にしてあたかも蒼海の如く、土地の人称して海地獄という。池中沸々として熱泉を蒸騰し、硫礬の気、鼻を撲て近づくべからず。これすなわち風土記にいう玖倍理湯井なるものか。 ▼たまたま来り観る者はことに驚怖する事にて、地獄原と云うは道路狭くして…（中略）…。煙気臭悪なること鼻を穿つがごとし。近隣の地、往々湯池あり。海地獄・紺屋地獄・鬼山地獄・圓内坊などと称するもの…（後略）。

1920年 (大正9) 『温泉案内』	▼鉄輪の生命で、一遍上人の開始と伝え、熱線上に石室を建て、16個の枕石を設けて、16人まで臥浴する仕掛けとなっている。	▼渋の湯：硫化鉄酸塩類泉で、微黄色不透明、渋を見る様である。 ▼熱の湯：炭酸性単純泉で無色透明、清澄鏡の如く綺麗な温泉である。 ▼その他、七つ瀑と称する湯瀧もあり、新渋湯もあり、薬師湯などもある。	▼富士屋別宅［室数22　収容人員142］ ▼万屋［室数26　収容人員152］ ▼大平屋［室数22　収容人員143］ ▼富士屋本家［室数23　収容人員144］ ▼常盤屋［室数17　収容人員106］ ▼筑後屋［室数11　収容人員63］ ▼皆木賃制で、一泊30銭ないし60銭	▼鍋山の南に在り、土地高燥海山の眺望が好い ▼温泉の豊富な別府町に譲らず、天然蒸気を利用して、戸々軒先に約15寸直径のセメント製壺状の竈を設け、炊事用として居る。	▼亀川駅より1里、朝日村鉄輪に在り。人力車賃32銭、馬車賃22銭。別府よりは1里半、人力車賃40銭。	▼附近には海地獄、坊主地獄があり、紺屋地獄を経て明礬温泉へ…。 ▼海地獄は鉄輪から西へ4、5丁登ったところ、地獄中の大王で千坪位の池である。 ▼坊主地獄は海地獄から南西7、8丁、附近は朝日公園と称し、自然の景趣に富む小遊園となって居る
1928年 (昭和3) 『名勝温泉案内』	▼この温泉の特長は蒸湯である。熱線の上に石畳を敷き、室を設け、その中に入って仰臥し、蒸気に蒸されるので筋肉痛、リウマチス、疝気、子宮病、手足麻痺などに驚くばかり効能があると伝えられている。 ▼蒸湯入口の薬師如来には、山なす松葉杖が奉納してあるのを見ても、その効験の大なることが想像されよう。	▼渋の湯は俗に皮膚病に効があると伝えられ、熱の湯は胃腸に効がある。		▼鶴見岳の緩傾斜面に一の温泉街をなし…(中略)…、風光明媚の地である。 ▼現在でも熾烈な蒸気を地上に噴出しているので、之を利用し熱気炊事が行われている。	▼別府市より乗合自動車(賃60銭)・人力車(賃1円20銭)・馬車(賃40銭)、亀川駅よりも同じく乗合自動車(賃40銭)・人力車(賃80銭)・馬車(賃30銭)の便がある。	▼鉄輪地獄、海地獄、坊主地獄
1931年 (昭和6) 『温泉案内』	▼現在、熱線上に石室を建て、16個の枕石を設けて16人まで臥浴する仕掛けになっている。	▼渋の湯：硫化鉄酸含有塩類泉、温度44度、微黄色不透明、渋のようで、性病、婦人病、リウマチス等。 ▼熱の湯：炭酸性単純泉、温度53度、無色透明、清澄鏡のように綺麗な温泉。 ▼新ノ湯：含鉄酸性泉、温度62度。	▼宿泊料1円30銭以上。 ▼常盤屋・富士屋本館同別館・大平屋・萬屋・筑後屋・御座・泉屋・港屋・中野屋・辰己屋・平野屋・温泉閣・扇屋・新屋・上富士屋・朝日屋	▼療養向き。 ▼鍋山の南にあり、土地高燥、海山の眺望がよい。温泉の豊富なこと別府に譲らず、天然蒸気を利用して、戸々檐前に直径約38cmのセメント製壺状の竈を設けて炊事をしている。	▼日豊本線亀川駅から4km、自動車15分、35銭。別府駅から8km、自動車20分、35銭。柴石から南800m。	※1920年(大正9)『温泉案内』と同様の内容
1935年 (昭和10) 『日本案内記・九州編』	▼鉄輪の生命は蒸し湯にありと称せられるほど、蒸し湯はこの地の名物で、熱線の上に石室を設けて十六羅漢に擬した16個の石枕を設けてあり、16人臥浴する仕掛けである。 ▼入口上にある薬師様に奉納山積せる松葉杖はこの治療法の効験を語るものである。	▼熱の湯：清澄鏡の如き炭酸性単純泉…(後略)。 ▼渋の湯：微黄色の塩類性硫黄泉で…(後略)。 ▼新の湯：含鉄酸性泉で…(後略)。	▼常盤屋・富士屋本店別館・大平屋・萬屋・筑後屋・御座屋・泉屋・港屋他数十軒。	▼この地一帯至るところ蒸気を噴出するので、戸々軒先にセメント製壺状の竈を設けて炊事に使用しているのは旅行者に珍しがられる光景である。 ▼温泉場の中央に鉄輪地獄があり…(後略)。	▼亀川駅の西南4km、別府駅からは西北6km、共に自動車の便がある。	※鉄輪温泉とは別項目に【地獄めぐり】の項目を設けて解説 ▼別府に行った人で地獄めぐりをせぬ人はない。

(注)　筆者作成

第3章　鉄輪温泉の諸相－検討と考察－

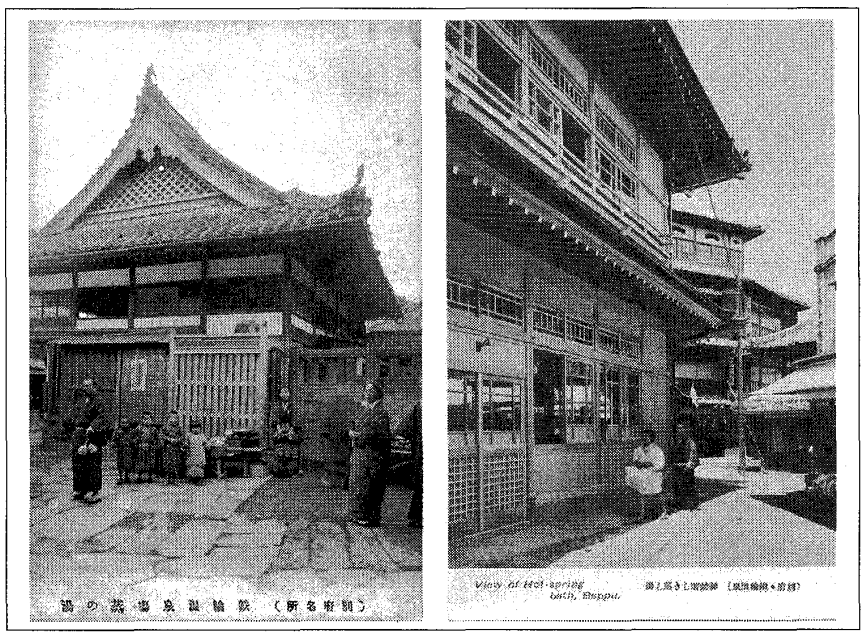
1）共同浴場

Ⅰ：蒸し湯

鉄輪温泉における中心的な浴場の一つが「蒸し湯」である。『温泉案内』などに「鉄輪の生命」と紹介されるほど、鉄輪温泉を語る上で不可欠な要素であり、地域の人々や湯治客に長く利用されてきた。文献による記述で目立つ内容としては、蒸気浴（サウナ）という入浴スタイルが珍しかったのか、各資料とも浴室の構造について細かく説明している点が挙げられる。

浴室内の定員は16名で、これは『日本案内記』に「十六羅漢に擬した16個の石枕を設けてあり…」

と記されているように、蒸し湯の内部構造は多分に宗教的な意味合いが強く反映されていた。この背景には、開湯伝説に名を残す一遍上人の存在が影響していよう。また、この内部構造にほとんど変化は無く、近年まで連綿と受けつがれてきた。一方、外観は数度の改築が行われており、近代においても第２図に写された大正時代の外観は 1936 年（昭和 11）に改築され、右側の写真の建物に変わっている。数度の外観変化に対して、浴室内部の構造を長く保持してきたことこそが蒸し湯の伝統性・真正性であると言えよう。



第２図：大正時代の蒸し湯（左）と昭和初期の蒸し湯（右）
（注） 今日新聞「懐かしの別府ものがたり」より引用

当時の蒸し湯の賑わいは 1909 年（明治 42）の『別府温泉繁盛記』から読み取ることが出来る[16]。冬から春先の湯治シーズンになると「この蒸し湯はさながら戦場のような混雑を呈する」と表現され、「（入浴に） ２～３時間から半日も待たなければ入ることが出来ない」と記されている。この原因は「一度にたった 16 人しか入れないのだ」と蒸し湯の収容人数の少なさを著者の大阪毎日新聞記者・菊池幽芳は指摘している。また菊池は「あちこちで南無阿弥陀の声が聞こえる。僕の隣でじいさんがしきりにやっている」と、当時の入浴客が念仏や、健康や感謝の願いを口にしながら蒸し湯に入っていたことを伝えている[17]。このことは、前述したように蒸し湯が信仰や、宗教的意味合いを強く持っていたことを意味していると考えられる。

第３図：「鉄輪温泉場湯瀧」絵葉書（戦前）
（注） 筆者所有

Ⅱ：その他の共同浴場

蒸し湯と並んで旅行案内書に紹介されていた共同浴場としては、渋の湯・熱の湯が挙げられる。渋の湯、熱の湯双方ともかつては「上の渋の湯」「下の渋の湯」などと言う風に２ヶ所に浴場が分かれていたという[18]。現在の渋の湯温泉は別称「上の渋の湯」と呼ばれており、東隣にある元湯（現在は廃湯）は「下の渋の湯」と呼ばれ、明治初期頃までは「渋の湯」

と言えば元湯のことを指していた[19]。1895年(明治28)に新湯を現在の場所に新築したことによって（表1：1902年（明治35）『豊後鉄輪温泉誌』)、新湯＝上の渋の湯、渋の湯＝下の渋の湯という呼称が生まれたと考えられる。1920年（大正9）の『温泉案内』には「新渋湯」が紹介されているが、新湯を指しているものと思われる。

また、新の湯・蒸し湯には「湯瀧」が併設してあった[20]。第3図は「(別府名所）鉄輪温泉場湯瀧」と題する戦前の絵葉書である。どの浴場を写したものか特定はできないが、当時このような温浴施設が共同浴場に併設してあったことは興味深い。

2）旅館

第2表：近代において鉄輪温泉で営業していた旅館名の変遷

	旅館名＼文献と年代	『別府温泉誌』 1909年（明治42）	『温泉案内』 1920年（大正9）	『鉄輪温泉御案内』 1920年代（大正末～昭和初）	『温泉案内』 1931年（昭和6）	『別府市鉄輪温泉場旅館案内』 1935年（昭和10年）頃	『日本温泉大鑑』 1941年（昭和16）	2006年現在
1	泉屋			○	○	○	○	現存せず
2	常盤屋	○	○	○	○	○	○	現存せず
3	筑後屋（本館）		○	○	○	○	○	現存せず
4	筑後屋新館					○	○	筑新
5	大平屋		○	○	○	○	○	現存せず
6	温泉閣			○	○	○	○	温泉閣
7	御座旅館（御座屋）			○	○	○	○	誠天閣
8	上富士屋			○	○	○	○	上富士屋
9	萬屋	○	○	○	○	○	○	現存せず
10	辰巳・辰己屋			○	○	○	○	辰巳屋
11	中野屋			○	○			中野屋
12	富士屋本家（富士屋）	○	○	○	○	○	○	ギャラリー富士屋
13	富士屋別荘（富士屋支店）	○	○	○	○	○	○	現存せず
14	新屋			○	○	○	○	現存せず
15	朝日屋			○	○	○	○	アサヒヤ
16	港屋			○	○	○	○	みなとや
17	平野屋			○	○	○	○	現存せず
18	菅原屋			○				不明
19	錦屋（にしき屋）					○	○	現存せず
20	扇屋				○	○	○	現存せず
21	温研アパート					○		不明
22	瀧本屋					○	○	現存せず
23	大黒屋					○	○	大黒屋
24	鶴屋					○	○	つるや
25	丸屋					○	○	現存せず
26	萬力屋					○	○	萬力屋本館
27	丸見屋					○	○	現存せず
28	白池旅館（白池）					○	○	白池地獄
29	瓢箪旅館部					○		ひょうたん温泉
30	瓢箪						○	ひょうたん温泉
31	備後屋					○	○	現存せず

(注) 筆者作成

鉄輪温泉における旅館は、近世から続く「常盤屋」「富士屋」をはじめとして、明治期には13軒あったと言われている[21]。その後漸増し、1921年（大正10）には18軒、昭和年代には20数軒にまで増加した[22]。具体的にどのような屋号の旅館が営業していたのかを、当時の旅館組合か

ら出された『鉄輪温泉（御案内）』や『別府市鉄輪温泉場旅館案内』などの資料（第４図）からまとめたものが第２表である。年次を追うごとに紹介される旅館数も増加しており、昭和初期には30軒弱の旅館名を確認することが出来、当時鉄輪で営業していた旅館のほぼ全てを網羅したといえる。

第４図：「鉄輪温泉（御案内）」（左）・「別府市鉄輪温泉場旅館案内」（右）
（注） 筆者所有

次にこれらの旅館が鉄輪のどの辺りで営業していたのかを住宅地図及び現地での聞き取りなどで確認、地図上で示した（第７図）。第２表の旅館名の左側数字が、地図上の数字に対応している。地図からは旅館が、蒸し湯・渋の湯・新湯といった共同浴場の周りに集中的に立地していたことが読み取れる。30軒弱の旅館の内、現在でも宿泊施設として経営しているのはその三分の一である。「現存せず」となった旅館の多くは現在、更地や駐車場などに転用されている。

各旅館の施設・設備面に関しては、朝日村時代（昭和６年頃）に出された鉄輪温泉の案内書[23]によると、内湯を完備した旅館があり各旅館には「電話の架設があって[24]、その上衛生その他の設備が完全に行き届いて居り、気楽で、気持ちがよろしい」と宣伝している。また、個人客から家族、団体客まで客数に合わせて適当な旅館が揃っていることもアピールしている。1941年（昭和16）の『日本温泉大鑑』によると、「鉄輪温泉」の項に掲載されている旅館27軒の内、最も規模の小さいもので客室数３、収容人数８名から、最大のもので客室数36、収容人数116名の旅館があり、その規模に多様性があったことがうかがえ、案内書の宣伝を裏付けている[25]。

また鉄輪温泉に限らず当時、別府温泉郷における旅館の料金体系は「旅籠制」と「木賃制（実費賄い制）」の二種類が存在していた。旅籠制はいわゆる「一泊二食付き〇〇円」と言われる、今日でも一般的な料金体系である。一方、木賃制は木賃（畳１、２枚あたりに設定されている借料、席料）を支払い、利用者の必要に応じて布団、浴衣、蚊帳などに値段をつけて貸し出す制度のことである（第３表）。木賃制は湯治客などの長期滞在者向けの料金体系であり、夜具などは自分で持ち込み、食事などは自炊にすれば経済的に滞在することが出来た。また、１室から数室貸切もできたので、方法次第では旅籠制と遜色ない過ごし方も可能であった。しかし、「木賃」という言葉が一般的には「低級な安宿」を指す言葉であったため、宿泊客が間違えたり、利用を敬遠したりしないように当時の案内書には必ずと言ってよいほど宿泊料金については紙幅を割いて説明している。

松田・大場（2004b）によると、別府（浜脇・北浜）において旅籠制料金をとる旅館の需要の高まりは、大正期に更に顕著になっていったと指摘している[26]。また松田・大場は大正年間に「木賃」の多くが「旅籠」の兼業となり、更に、「その後の時勢の推移に伴い長期滞在客は漸減して一、二泊の観光客が増加するに至り、宿屋営業は木賃制よりも旅籠制に重きを置くこととなった」と分析している。そして、旅籠制の増加は「浴客の滞在日数の短期化を示すひとつの指標であるといえ、さらに、短期滞在客の増加とは、湯治を主体とする近世以来の温泉地利用形態の転換をも意味する」と考察している。

第3表：別府温泉の「木賃制」料金体系（1929年）

品　　目	料　　金		
木賃料（畳2枚の割）	1等　60銭	2等　50銭	3等　40銭
貸切　（席料・朝晩味噌汁・昼漬物・器具使用料・手数料・電灯料など含む）	一間貸切は畳1枚1日20銭ないしは30銭の割		
布団	1枚5銭ないし25銭		
蚊帳	15銭ないし30銭		
褞袍（わたいれ）	1枚10銭ないし25銭		
浴衣	5銭ないし10銭		
米・炭・醤油　日用品など	時価の実費		
刺身などの一品料理の旅館への申付け	1品20銭ないし30銭ほど		
備考）10歳未満の者は半額、日帰り客は1日分を申し受ける、夜具持参者は各等10銭			
備考）大正末～昭和初期の鉄輪温泉における木賃料は、1泊3食付で1等1円50銭、2等1円20銭、3等95銭となっている。			

（注）「別府温泉案内」（1929）、「鉄輪温泉御案内」（大正末～昭和初期）より作成

これを踏まえて、鉄輪温泉のケースでみると1920年（大正9）の『温泉案内』によれば、鉄輪の旅館は「皆木賃制で」あったと記されている（第1表）。その後は鉄輪においても「旅籠制」の料金体系が併用されていったと考えられる。この背景は、前述の松田・大場の分析による通りであろう。しかし、鉄輪においては木賃制が衰退したわけではない。むしろ旅籠制という料金体系が付随的に導入されたと見るべきであろう。鉄輪における湯治場としての機能は戦後も継続し、1960年代頃まで自炊タイプの貸間宿が多く展開していた[27]。よって鉄輪においては観光化・短期宿泊増加の影響の中にあっても、湯治場としての確固たる機能が維持されていたといえる。

3）街のようす

現在では、市街地の一部分となっているが、近代の鉄輪は第5図に見られるように、周辺に田園風景が広がっていた。従って、南・東側は大きく視界が開けており、別府湾の光景が望めていた。各文献の記述からも、鉄輪におけるロケーションのよさは頻繁に取り上げられている（第1表）。

集落の東南端には「ひょうたん温泉」（第5図右上）の展望台があり、鉄輪のランドマークとして異彩を放っていた。展望台の建設は1928年（昭和3）、経営者の還暦祝いに建設した[28]。施設

内には展望台の他、岩窟泉・瀧湯・花の湯（藤棚を設けた露天風呂）・卯辰の湯（蒸湯と砂湯）・温泉プールなど趣向を凝らした浴場があり、湯治場としての鉄輪温泉にあってアミューズメント性の強い施設であった。

第５図：鉄輪温泉全景とひょうたん温泉（戦前）
（注）「地獄めぐり解説絵葉書」「（絵葉書）瓢箪温泉」より

また、鉄輪温泉の景観を特徴付けるものとして「地獄蒸し竈（かまど）」がある。1886年（明治19）の『日本鉱泉誌』以降頻繁に紹介されており、とりわけ1935年（昭和10）『日本案内記・九州編』には「（地獄蒸しが）旅行者に珍しがられる光景である」と評されたほどであった。構造は温泉の噴気孔に竈などを設けて、その上で魚や野菜などを調理するものである。湯治客も大いに活用しており、食材の調達は集落内の商店などを利用したと思われる。当時の鉄輪における店舗は「日用品・小間物・食料雑貨から土産品にいたるまで、入湯客に必要な品物は、此地で充分間に合う程度に、商店も夫々完備しております」と宣伝されていた[29]。

第４表：鉄輪地区における業種別店舗構成（1954年）

個人商店（業種不明）	最寄り品		買回り品		その他			
	食品	日用雑貨	衣料・身辺雑貨	文化品	サービス		非商店・官公庁	病院・医院
					宿泊施設	その他		
21	青果店 1	薬局 2	履物 1	電気・ラジオ 2	旅館 26	キャバレー 1	銀行 2	8
	米穀・精米 4	タバコ 2	衣料品 4	玩具 1	貸間宿 39	パチンコ 4	農協 1	
	魚屋 3		化粧品 1	書店 1	ホテル 1	理容・美容 6	郵便局 1	
	肉屋 1			文具 1	保養所 1	鍼灸 7	市出張所 1	
	豆腐 1					食堂・喫茶 6	駐在所 1	
	パン屋 1					新聞販売 2		
	食料品 3					映画館・劇場 1		
	菓子製造・販売 3							
計 21	計 14	計 4	計 6	計 6	計 67	計 27	計 6	計 8

（注）『別府市住宅案内図』（1954）より作成

第４表は1954年（昭和29）の住宅地図から、鉄輪地区で営業していた店舗の構成をまとめたものである。戦前における店舗構成と恐らく大差は無いと思われる。宿泊施設の多さは当然のことながら、とりわけ自炊タイプの貸間宿の数が顕著であり、湯治場としての機能が維持されていたことが分かる。興味深いのは「鍼灸院」の７軒であり、これもまた療養・湯治の温泉場の特徴を反映している。全体的には日常生活に必要な最寄り品を中心に、買回り品、飲食店、劇場、金融機関が揃い、前述の通り「入湯客に必要なものは、此地で充分間に合う」店舗構成となっていたことが分かる。

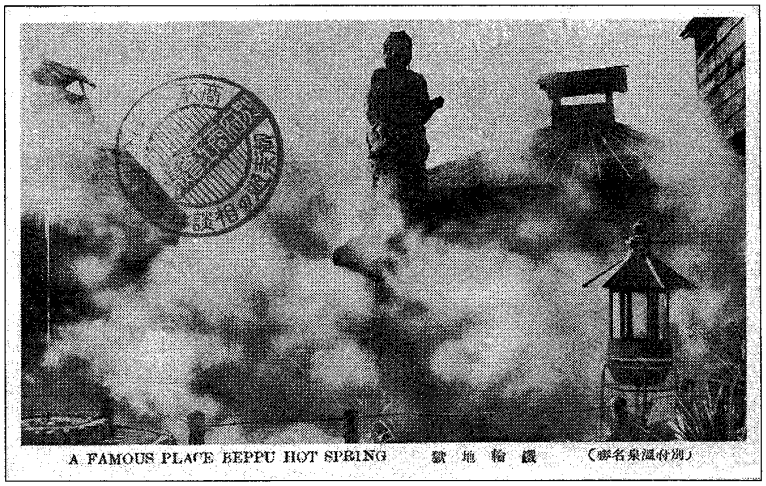
4）交通

鉄輪温泉への交通アクセスとしては、明治時代は人力車・馬車が一般的で、別府や亀川などへの定期便があった。道路状況は路面などに多少のデコボコはあったが、交通に支障をきたすほどではなかったようである。また1908年（明治41）の『豊後鉄輪みやげ』には「昔の鉄輪はいざ知らず、今の鉄輪は山間の一温泉地としてみるべきでない。五、六年前から当事者が道路開削を企てたので今日では車道も完全に近いものとなってきた。それに近来は別府町より明礬に通ずる車道も出来て鉄輪温泉までは何の苦もなく立ち寄られる便利の世の中となった」と記されており、日を追うごとに交通アクセスが向上している様が垣間見られる(30)。

昭和時代に入ると、第1表に見られる記述にも「乗合バス・自動車」の交通手段が登場する。1921年（大正10）に皇太子の地獄巡幸の為に道路整備が行われ、亀川海岸から鉄輪を経由して鶴見へ抜ける新道が完成した（地獄めぐり循環道路）。これによって、後述する「地獄めぐり観光」は自動車による大量輸送、時間短縮によって飛躍的に発展した。鉄輪温泉へのアクセスも更に向上したのである。1928年（昭和3）別府を訪れた高浜虚子は、紀行文(31)の中で「この前（1920年（大正9））地獄めぐりをした時は、人力車でなければ通れなかった。所によると徒歩でなければ通れなかった。それも、朝出掛けて遂に鉄輪温泉に一泊して、二日がかりであったことを思うと、夕方の五時頃から涼みがてらに自動車に乗って出掛けるなんか、随分変化したものと思った」と述べており、交通アクセス向上の一端を窺い知ることが出来る。

5）地獄・地獄めぐり

鉄輪の郊外には地下から高温の熱泥や熱水が噴出する場所があり、「海地獄」や「坊主地獄」などと呼ばれていた。1910年（明治43）に海地獄が遊覧施設を施し初めて2銭の入場料を徴収した。これ以降その他の地獄も同様な動きを示し、地獄は観光資源として成立した。



第6図：「（別府温泉名勝）鉄輪地獄」絵葉書（戦前）
（注） 筆者所有

地獄めぐり観光の飛躍的発展は、前述の地獄めぐり循環道路による道路整備と、これを利用したバス・自動車などによる定期観光ルートの確立であった。最も著名な例は1927年（昭和2）油屋熊八（あぶらやくまはち）が設立した亀の井自動車による運行である。当時としては日本最大の25人乗りバスを導入し、日本初の女性バスガイドを乗務させ、七五調の節回しで名所案内をする様子が物珍しさも手伝って爆発的にヒットした。他のバス会社も同様のサービスを行って追随し、これにより地獄めぐりは別府観光の花形となった。1931年（昭和6）頃の地獄遊覧者の数は

50 万人を数えていたと言われており[32]、その賑わいがうかがえる。また 1935 年（昭和 10）『日本案内記』には「別府に行った人で地獄めぐりをせぬ人はいない」と伝えており、従来の旅行案内書では鉄輪温泉の情報に付随して宣伝していたものが、「地獄めぐり」という独立した項目を設けて紹介されている点を見ても、地獄巡りが別府観光の中で重要な位置を占めたことが分かる。

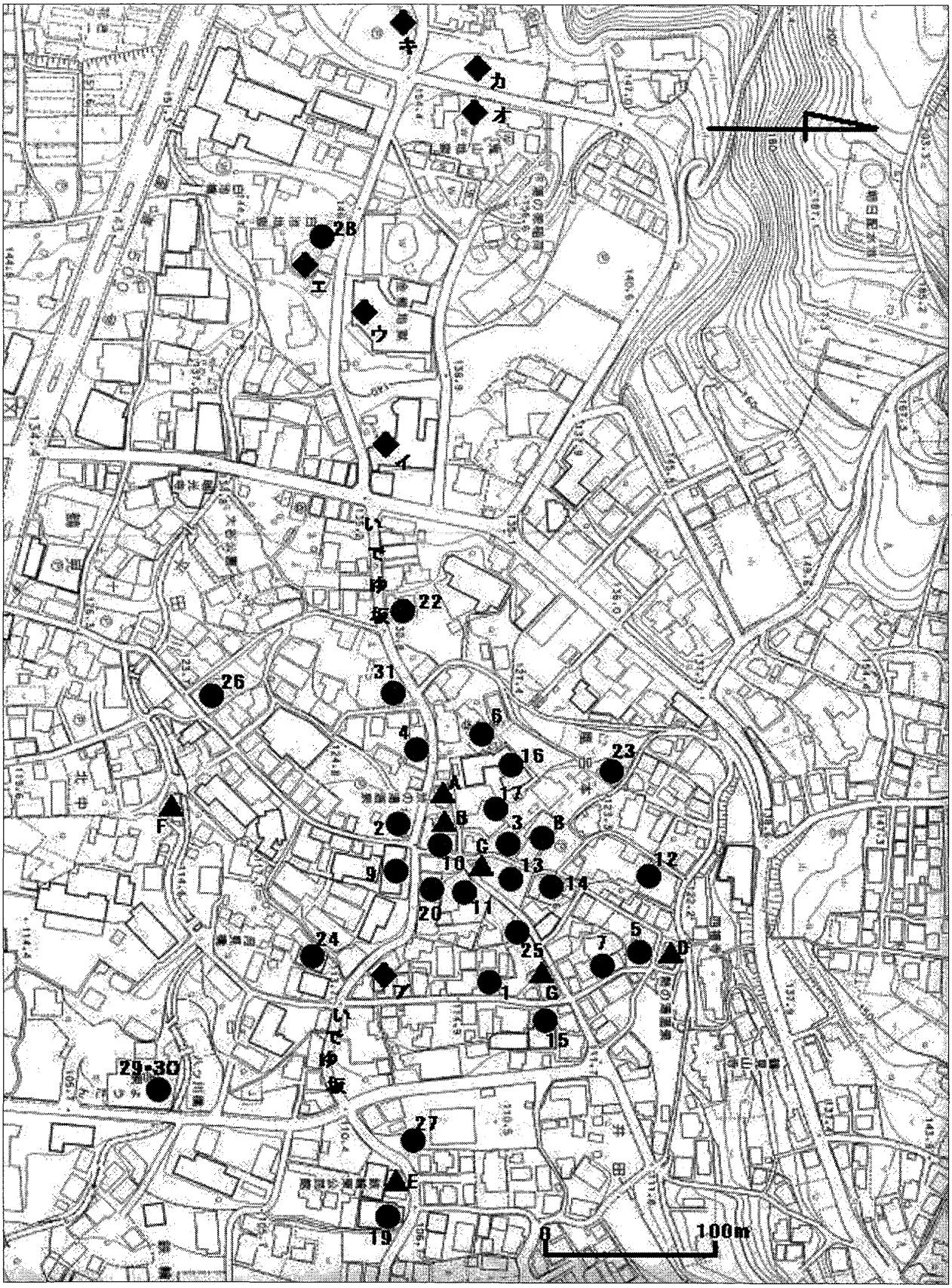
このような地獄の発展を背景に、当初は自然湧出だった地獄のみが、次第に人工掘削によって蒸気などを噴出させ意図的に地獄を創出したものが現れるようになる。1922 年（大正 11）には鉄輪の街中に「鉄輪地獄」が開設した。オーナーは当時の鉄輪郵便局局長佐原氏であり、120 坪の敷地に第 6 図のような光景が広がっていた。鉄輪地獄の開発を前後に第 5 表のように短期間に次々と「人工地獄」が生まれ、各地獄は独自色を出す為にワニを養殖したり、熱帯植物を育てたり、土産品を売ったりと様々な趣向を凝らした施設へと変化していった。

第 5 表：鉄輪周辺における人工掘削によって開発された地獄一覧

地獄名称		噴出・開業年	備　　考
ア	鉄輪地獄	1922 年（大正 11）	土産品の販売、貸間営業も兼営
イ	雷園地獄	1937 年（昭和 12）・ 1941 年（昭和 16）開業	遊覧目的としての地獄施設には主力を用いず、治療設備に重点が置かれている
ウ	金龍地獄	1932 年（昭和 7）	温室栽培（バナナなど）
エ	白池地獄	1931 年（昭和 6）	最初は玖倍理地獄と称す。売店あり。隣接地に浴場及び旅館。
オ	鬼山地獄	1932 年（昭和 7）	世界最初の温泉利用のワニ養殖場。遊覧客に人気。
カ	かまど地獄	1936 年（昭和 11）	1936 年以前は血の池地獄附近で営業していたものを移転。売店では「カマドパン」を製造販売。
キ	十万地獄	自然湧出 （一部大正年間に開発）	別府市有地に属す。鉄輪温泉場の泉源。

（注）　田中・後藤（1942）他より作成

しかし、半ば過熱気味の地獄経営に対し、批判的な意見も出てくるようになる。戦前の地獄めぐり観光の実態について調査した田中・後藤（1942）[33]は、「あまりにも人工に走りすぎて見世物式に堕し、卑俗な看板立て札及び板囲みよって風致を損ねているものが少なくない」と述べている。また 1935 年（昭和 10）の旅行案内書『日本案内記・九州編』には「近頃は人工的の地獄もあると云うが如何なものか」と人工地獄への批判的な見解がみられる。



凡例　●…旅館（1～31は第2表に対応。18・21は不明の為欠）　▲…共同浴場（A: 新湯 B: 渋の湯 C: 蒸し湯 D: 熱の湯 E: 大師湯 F: 谷の湯 G: 筋湯）　◆…地獄（ア～キは第5表に対応）

第7図：近代の鉄輪温泉における旅館・共同浴場・地獄立地分布図

（注）『別府市住宅案内図』（1954）、『ゼンリンの住宅地図』（1962）（1969）、及び現地調査より作成

第４章　むすび

本稿では鉄輪温泉を事例として、近代における同温泉地の諸相を、各種資料を用いて検証した。鉄輪は蒸し湯と数箇所の共同浴場を中心とした風光明媚なひなびた湯治場として温泉地を展開してきた。明治末期以後、周辺道路の改修・整備などによって別府・亀川からのアクセスが向上し、鉄輪温泉を取り巻く環境は大きく変化した。その最たるものが、地獄開発と地獄めぐりの定期観光ルートの誕生であった。鉄輪地獄をはじめ、郊外には様々な人工地獄が開発されていった。ひょうたん温泉のような遊覧設備のある浴場が出来、この時期、鉄輪における観光地的な要素は急速に広がったと言える。

しかし、鉄輪温泉の湯治場としての機能は揺らぐことが無く、戦後も維持されていった。第４表で示したように 1954 年（昭和 29）当時でも旅館とりわけ貸間宿が多く営業し、最寄り品などの生活に密着した地域の店舗構成であった点からも、歓楽的な観光地になったとは言い難い。同じ別府温泉郷にあって、急速な観光地化・歓楽化が進んだ浜脇・北浜とは全く異なった地域変容を鉄輪は歩んだ。こうした点を鉄輪温泉は当時から既に独自性として大きく売り込んでいたことが読み取れる。「療養の楽土」「療養の理想郷」(34)とうたい、「鉄輪と明礬温泉は別府と異なり、真の入湯本位の療養地でありますから…」(35)といった文言を案内に盛り込み、それとなく歓楽化が進んでいた別府（浜脇・北浜）温泉との差別化を含んだ宣伝表現が使われた点は興味深い。

筆者は本稿冒頭で、近代ツーリズムの萌芽による温泉地の湯治場から観光地化への機能変化の流れを述べたが、鉄輪温泉の地域変容過程は必ずしもこの限りではない。今後は全国的な温泉地の近代を概観した上で、鉄輪温泉の場合の位置付けを再検討する必要があると考える。

［付記］　本稿の作成にあたり御指導下さった中山昭則先生に感謝申し上げます。また、現地調査において鉄輪・温泉閣河野忠之氏には資料提供や有益なお話を聞かせていただきました。地理学研究室の大崎彩（文化財学科）・永島実緒（文化財学科）・谷口雄一（史学科）の各氏には現地調査及び図版作成などに協力頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献・注

白幡洋三郎：『旅行のススメ』中央公論社（1996）p11 ～ 106

（1）鉄道省：『日本案内記 九州篇』博文館（1935）p63　他より

（2）関戸明子：「北関東における温泉地の近代化－温泉の利用形態と交通手段の変化－」『群馬大

学教育学部紀要 人文・社会科学編』53号（2004）p201～221

（3）神田孝治：「南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性－近代期における観光空間の生産についての省察－」『人文地理』53巻5号（2001）p24～45

（4）高砂淳:「温泉リゾートと郊外地開発－観海寺、別府荘園文化村計画」『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会（2000）p499～514

（5）中山昭則：「大正期における別府温泉の別荘地開発」『温泉地域研究』創刊号（2003）p17～22

（6）松田法子・大場修：「泉源開発と旅館街の立地傾向に見る近代大規模温泉町の成立過程－別府温泉を事例として－」『日本建築学会計画系論文集』582号（2004a）p153～159、松田法子・大場修：「近代大規模温泉町の成立過程と大規模旅館の諸相－別府温泉を事例として－」『日本建築学会計画系論文集』582号（2004b）p145～152。

（7）浦達雄:「別府温泉における旅館業の成立」『総合観光研究』3号（2004）p1～6、浦達雄:「近代における別府温泉郷の形成過程」『温泉地域研究』5号（2005）p1～12。など浦は別府をフィールドに多くの研究を行っている。

（8）小堀貴亮・山村順次：「別府市鉄輪温泉における湯治場の地域変容」『温泉地域研究』2号（2004）p49～54

（9）中山昭則：「別府温泉郷における地獄の観光開発と地獄組合」『温泉地域研究』5号（2005）p13～22

（10）浦達雄：「明礬・鉄輪・別府温泉の観光診断」『別府大学短期大学部紀要』19号（2000）p49～69

（11）一遍上人探究会・別府大学文化財研究所：『蒸し湯っちなんなん －蒸し湯の学術調査報告書－』（2006）

（12）別府大学地理学研究室「別府鉄輪温泉むし湯の利用実態からみた資源性」・「別府温泉地獄の資源性構築と地獄組合の関わり」『別府大学地理学研究室研究年報』4号（2006）p1～16

（13）福岡藩の学者であった貝原益軒の『豊国紀行』や、脇蘭室の『函海漁談』などに蒸し湯に関する記述が見られる。　前掲（11）より

（14）安部作男：『朝日村史』（1977）より

（15）朝日村役場：『鉄輪と明礬温泉』（1931）より

（16）今日新聞「懐かしの別府ものがたり 24」（2006年8月22日付）

（17）今日新聞「懐かしの別府ものがたり 25」（2006年8月23日付）

（18）下の熱の湯は現在の「洗濯場跡」にあったと言われている。これに対し現在の熱の湯は「上の熱の湯」と呼ばれていた。（現地での聞き取りより）

（19）「元湯」の呼称は、昭和40年代頃に渋の湯・新湯・蒸し湯の市営温泉再編計画により、渋

の湯の廃止決定を受け、地元の人々が存続を嘆願。「元湯」という呼称の元に存続したことによる。（現地での聞き取りより）

(20) 鉄輪宿屋組合：『療養の楽土 鉄輪温泉（御案内）』より

(21) 別府市観光協会：『別府温泉史』いずみ書房（1963）p120～121より

(22) 前掲（21）より

(23) 前掲（15）より

(24)『別府市鉄輪温泉場旅館案内』に掲載されていた旅館28軒の内、電話番号が併記されていないものは7軒。電話を引いていた旅館の内、常盤屋・萬屋・富士屋の3軒は長距離電話の加入者であった。

(25) 日本温泉協会：『日本温泉大鑑』（1941）p 993～994

(26) 前掲（6）

(27) 前掲（8）

(28) 三和：『別府懐かし物語』ネキスト（2004）p 8

(29) 前掲（15）

(30) 安東作良：『豊後鉄輪みやげ』（1908）p 5

(31) 高浜虚子：「別府温泉」『日本八景 八大家執筆』平凡社（2005）p162～189

(32) 前掲（15）

(33) 田中喜一・後藤佐吉：「別府の地獄遊覧事業に関する調査」『大分高等商業学校 研究集報』17巻1号（1942）p 1～27

(34) 前掲（20）

(35) 前掲（15）